

[人間と文化 81～87 (2017)]

# 幼児教育における子どものうた遊びの研究と課題

秦 昌子<sup>1</sup> 梶 間 奈 保<sup>2</sup>  
(<sup>1</sup>松江市立揖屋幼稚園・保育園 <sup>2</sup>保育学科音楽研究室)

Research and Problems of children play songs in Early Childhood Education

Masako HATA, Nao KAJIMA

キーワード：幼児教育，うた遊び，子ども，実践研究，音楽表現

Keywords：early childhood education, play songs, children, practical study, musical expression

## 1. うた遊びについての問題提起

子どもは日常の中で多くのうた遊びに触れる。友達と一緒に歌を口ずさんでお手合わせをしたり歌をうたいながら身体を動かして遊んだり、そういった行為の中で自然と歌と身体の動きが合わさり、音楽を介したいいきとした遊びが見られるのである。またうた遊びは、楽器がなくても歌声と身体だけでも遊ぶことができ、リズムや旋律を覚えやすいものも多い。そのため他者へと遊びが伝わりやすく保育現場においては身近な保育教材といえる。本研究の着目するこの「うた遊び」は、手遊び、指あそび、遊び歌といった類似の用語もあるが、本稿ではこれらについても歌いながら動きを伴う遊びとして同様に考え、それらについても本研究では「うた遊び」という用語を用いる。

笠井・久原（2015）らが実施した保育現場での手遊び歌の調査によれば、「トントンこぶじいさん」や「これくらいのおべんとうばこ」、「やきいもグーチーパー」などが調査した園の半数以上の園で頻繁に歌われている手遊びとして報告されている。これらはうた遊びに関する出版物にも多く掲載されており、保育園や幼稚園で実習を行う学生の中でも認知

度も高く、実際に実習で実践したうた遊びの1つともいえるだろう。さらに、うた遊びは保育の中でもよく使われ、例えば、絵本を読む前や注目するための手段として保育活動の導入に取り入れられ、保育者と子どもたちの間でやりとりされることが多い。しかし、上述したような代表的なうた遊びであっても、全ての子どもの興味関心をひくとは言いがたく、子どもの年齢や発達、個人の関心によってうた遊びの在り方も違う。また、保育者個人の関心の高いうた遊びや出版物に掲載されている通りのうた遊びに留まってしまうなど、うた遊びが制限されてしまっているのではないだろうか。保育者はこういったうた遊びの課題を理解した上で、うた遊びを安易に導入時の手段として捉えるのではなく、子どもの発達や園の教育方針と関連させながら意識していくことが必要だと考えられる。

以上のような問題意識のもと、本研究ではうた遊びを保育に活かす教材として再認識するために、保育現場と大学でのうた遊びの実践課題について明らかにしていき、両者が連携してうた遊びについて研究を深めることのできる教材「うた遊び手帳」について検討を行う。

## 2. 保育におけるうた遊びの現状と課題

### 1) うた遊びの実態

保育現場では手遊び、歌、音楽に合わせて身体を動かすなど日常的にうた遊びが行われている。乳幼児の名前を呼ぶ時に「○○ちゃん」と何気なく節をつけたり、楽器やコンパクトディスク（以下、CD）等を用いて心地よい音楽を流したりと、子どもの生活には欠かせないものである。以下の表1は、本学の学生にボランティア先や実習先などの保育現場で行われていたうた遊びについて、思いつくものをあげてもらったうた遊びをまとめたものである。なお、ワークシートを研究で用いることについて、対象者からの同意を得た。うた遊びの曲名が分からず歌詞の内容を書いているものもあるが、わらべうたや季節のうた、テレビアニメのうたなど約150曲ものうた遊びがあげられた。中には聖歌や園独自で作られたうたを日常の中で歌っている園もあり、園の教育方針を反映させたうた遊びが行われているとい

える。

次に表1であげられたうた遊びの中から、うた遊びの内容が把握できるうた遊び89個を抽出し、それらを以下の5つのカテゴリに分別した。

- ①「生活習慣のうた」・・・生活習慣に関するうた遊び
- ②「指・手あそび」・・・主に指・手を使ったうた遊び
- ③「身体・顔あそび」・・・主に身体・顔を使ったうた遊び
- ④「ふれあいあそび」・・・主に相手とふれあうことを中心とした遊び
- ⑤「わらべうた」・・・わらべうたの遊び

上記のカテゴリに89のうた遊びを分別したところ「指・手あそび」に関するうた遊びが全体の37%、「身体・顔あそび」が全体38%であった（図1参照）。「生活習慣」や「わらべうた」のうた遊びにも手や身体を使ったうた遊びが含まれていることを考えると、

表1. 保育現場で見られたうた遊びのまとめ

あいさつの歌	一匹の野ねずみ	かごめかごめ	ころころおにぎり	月	パン屋に五つつのメロンパン	ようかい屋さん
アイスクリームの歌	イモムシ家族が目を見ます	肩たたき	ごんべさんの赤ちゃん	手のひらを太陽に	パン屋におかいもの	りんごのほっぺ
アイヌの漁獲のうた	浦島太郎	かなずきトントントン	さかながはねて	手をたたきましょう	ピカチュウ	ワニの家族(カバVer)
あかとんぼ	運動会のうた	かまきりじいさん	里の秋	トコトコちゃん	ひげじいさん(アンパンマンVer)	ワニの家族
上がり目下がり目	エビカニクス	かみなりどんがやってきた	さようなら	トマトはトントントン	ひげじいさん	山の音楽家
秋	おうま	貨物列車	さよなら	どんぐりころころ	ビリーブ	園独自のうた
秋だよ秋だ	オオカミさん	カレーライス	三匹のこぶた	どんな色が好き	ペンギンマークの百貨店	聖歌
あくしゅでこんにちは	大きくなったら	きいろいだまご	さんぽ	とんぼのめがね	ボンボコたぬき	園歌
あさのうた	大きな栗の木の下で	きのこのうた	幸せなら手をたたこう	納豆	まっかなあき	
あじ(いわし)のひらき	おおきかなつとネバネバ	キャベツの中から	証誠寺のためきばやし	虹	マッサージのうた	
あたまかたひざポン	おじいちゃんもおばあちゃんも	キラキラ星	スイスイペンギン	にんげんっていいな	松ぼっくり	
あなたのおなまえは？	お父さんがかけてで曲がり角でごっつんこ	くいしんぼうおぼけ	ズンズンズンドコ	忍者のうた	まけうさぎブット	
アルプス一万尺	お寺のしょうさん	くだもの列車	世界に一つだけの花	ニンニンジャーのうた	魔法の指	
あんパン食パン	鬼のパンツ	グーチョキパー	せんせいおはよう	のぼるよコアラ	ミックスジュース	
アンパンマン体操	おばけなんてないさ	元気いちばんパン	せんせいとお友達	はじまるよ はじまるよ	ミッキー・マウスマーチ	
アンパンマンマーチ	おはよう	元気っ子体操	ソーラン節	バスごっこ	ミツ矢サイダー	
一たすで忍者だよ	お弁当箱のうた	げんこつやあのためきさん	ソレソレソレノ祭りだ！祭り	バスにのって	虫の声	
一丁目のウルトラマン	おもちゃのチャチャチャ	ゴーゴージャンケン列車	たいこのうた	八兵さんと十兵さん	むすんでひらいて	
一丁目のドラネコ	おやつ之歌	こおろぎ	たからじま	パッター・カマキリ・ダンゴムシ	メリーさんのひつじ	
一と一を合わせたら	帰りの歌	ここです ここです ここいます	たこやきの手遊び	ハッピーバースディ・トゥーユー	もも・りんご・なし・パイナップル	
一と五で	かえるのうた	子どもと子どもがけんかして	たんじょうび	バナナくん体操	やきいもグーチャーパー	
一本橋	かえるの体操	小鳥とぶどう	小さな畑大きな畑	はらぺこ青虫	やさいのうた	
一本指の拍手	かき氷	こぶたのさんぽ	ちょちょあわわ	パンダうさぎコアラ	山小屋一軒(アンパンマンVer)	

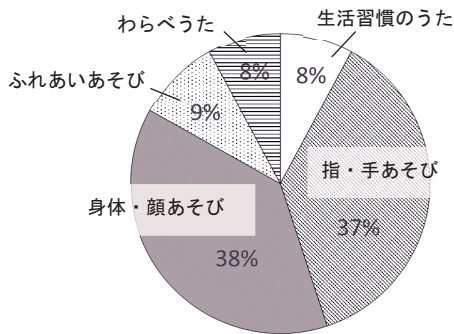


図1. うた遊びの種類別のグラフ

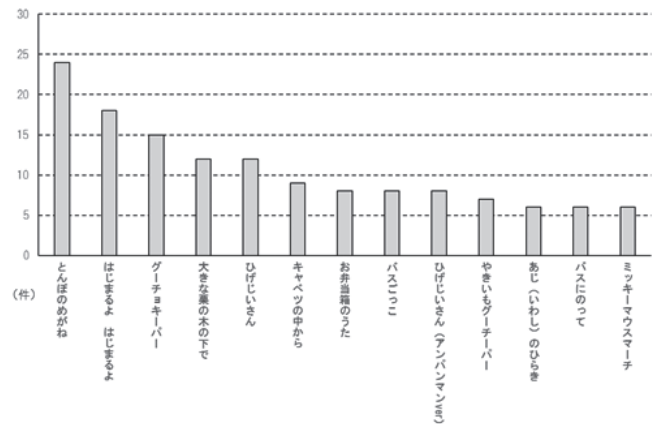


図2. 保育現場で見られたうた遊びの上位

うた遊びはうたを通して身体を動かしながら生活習慣を意識したり音楽感覚を育くむもののだといえる。次に図2は学生があげたうた遊びの中で多く取り上げられている上位をグラフにしたものである。「とんぼのめがね」や「やきいもグーチョキパー」、「大きな栗の木の下で」など季節が感じられるものや、「はじまるよ はじまるよ」や「キャベツの中から」といった絵本の読み聞かせ前に遊ぶうた遊びも多いということが分かった。また「ひげじいさん」のうた遊びの歌詞をアンパンマンバージョンに変えて楽しむように、1つのうた遊びが歌詞や仕草を変えながら親しまれている。

## 2) 保育現場におけるうた遊びへの考察

前節では、保育現場で親しまれているうた遊びの題材について中心に述べてきた。しかし、どの園でも多く親しまれているうた遊びが目の前にいる子どもに適しているわけではなく、子どもの生活環境や保育とつながりながらうた遊びを幅広く取り入れなければならない。うた遊びは、ごく自然と子どもたちの中から生まれ遊びへと発展していく場面もあれば、保育者自身がうた遊びのねらいを意識して行う場面もある。どちらにおいても、題材である楽曲を再現することが目的ではなく、子どもとのやりとりや日常生活との関連性を意識してうた遊びを行わなければならない。

### (1) 日常生活の中でのうた遊び

保育現場では子どもの登園時が保育者と出会うと

ても大切な瞬間である。この一日の活動のスタートを心地よいものや、楽しさを感じれるための環境として音楽を流す場合もあれば、朝集まった時にうたう歌や手遊びなどに季節を感じられるもの、子どもの発達やその日の様子を保育者は意識して取り入れていく必要がある。例えば、朝の挨拶に合わせて歌う歌や手遊びは、年齢によってフレーズの長さや音域を考慮してうた遊びを選択及び変容しなければならない。少人数クラスの場合は、一人ひとりの名前を歌に入れることで子どもが自分の名前を呼ばれる喜びや自分が大切にされていることを感じる。さらに、子ども同士が名前を意識し、低年齢の場合でも自然と名前を覚えて仲間意識を持つこともできるといえる。また、朝に声をそろえて歌ったり友達と一緒に動いて楽しんだりすることは、他者とのコミュニケーションを育む土台となり、保育内容「人間関係」の項目と深く関連する。近年の子どもの課題にコミュニケーション不足があげられることが多いが、うた遊びは保育者や仲間と一緒に楽しむ活動であり、遊びを通して人とのつながりを実感できるものでもある。子どもの名前をAちゃんと呼ぶときも節をつけて呼んでみるなど、子どもとのコミュニケーション手段として用いることもある。集会の場でも「〇組さん」と節をつけながら呼び、「はいー」と節をつけて答えるようにするとそれだけでも他者との関係が成立したことになる。またやりとりが上手いけば保育者の話を聴く(聴ける)環境が整う。

一方、保育現場での生活は毎日同じ活動を繰り返して行く場面が多くある。例えば朝や帰りの挨拶、給食、歯磨き、絵本の読み聞かせ、掃除や片付け、昼寝などがあげられる。これらの活動に入るきっかけとして手遊びや歌が使われる場合も多く、一定の音楽やうた遊びに決めておくことで、活動の始まりや終わりを子どもたちに自然と伝えることができ、子ども自身が活動を楽しく自ら考えて行動する力へとつながってくる。

うた遊びは保育内容「環境」の項目ともつながりが強く、保育現場では特に、園外保育や絵本の読み聞かせの際にうた遊びの活動が生きてくる場面がある。例えば園外保育では、歩きながら見つけた生き物や自然物を題材としたうた遊びやそれらに触れて感じたことを歌につなげて楽しむこともある。また聞こえてきた音に気づいてそれらを子ども自らが言葉にしたり、どんな音がするか歩きながら一緒に探していく中で自然とうた遊びへと発展したりすることもある。これらは偶発的な要素もあるが、水のせせらぎや鳥の声などを保育者が事前に環境を知ったうえで出かけることにより保育のねらいをもって体験させることができる。自然現象や身近な環境の中での実体験は子どもの心を揺さぶる体験となるため、保育者としてどのような体験をさせたいか考え、関連するうた遊びについても把握しておくことが大切である。

## (2) 題材としてのうた遊びの課題

保育者が意図して活動の中で取り入れるうた遊びには明確なねらいが必要であり、それらが子どもの心身の育ちにより有効な活動となってくる。しかしながら、保育現場の現状として若い世代の保育者が多く、うた遊びの題材にTVで話題になっているものやアニメなどメディアの影響を受けたものを取り入れる傾向が目立っている。現代に生きる子どもと関わる上で流行のものを取り入れることもあるが、保育者は幅広く豊かな教材の中から子どもの実態や発達にふさわしいものを選択していかななくてはならない。保育所・幼稚園は小・中学校のように教科書がなく、保育者自身が選択したものがそのまま子どもに伝わる教材となる。そのため、子どもの何を育

てていくのかという視点を明確にし、保育者は教材の提供者としての責任を自覚しなければならない。一方、同じ教材でも、取り入れ方や活動する内容によって、幅広い年齢の集団や音楽経験の違いがみられる集団の子どもでも遊べるものもある。例えば、『あめふりくまのこ』（作詞：鶴見正夫、作曲：湯山昭）は、歌を歌うことだけを目的とすれば、4、5歳児で使用する教材として扱われることが多い。しかし、この曲はストーリー性の高い歌詞の内容であるため、紙芝居やペープサート、パネルシアターなどにしてうた遊びとして行うことで低年齢の子どもから楽しむことができる。また、歌う時や聴く時に“くまのこ”の気持ちを考え心情面の育ちにつながったり、雨の音を意識することで雨の日が楽しいものとなったりと、うた遊び一つで子どもの心身に働きかけることとなる。うた遊びは新生児でも心地よさを感じることができる。

保育者は、各年齢で年間指導計画を立てて活動の位置づけをしていく中で何が目的かといったねらいをよく考えて題材を選曲していかなければならない。『かもつれっしや』（作詞：山川啓介、作曲：若松正司）を5歳児のクラスで行う場合、保育者は曲の速さを調整して、「走る」「電車になりきって動く」など子どもが経験する様々な要素を意識しながら軽快なリズムで遊びを進めていく。子どもは「ガッちゃん」の場面で相手を見つけて手を合わせ、出会ったことを喜びジャンケンし、勝ち負けを決めそれを受け入れながら、また次のゲームへと進む。相手を探したり勝敗を瞬時に見極めて結果を受け入れたりすることを考えれば、5歳児ならではの活動と考える。では、5歳児以下の年齢の子どもではどうだろうか。4歳児の活動は図3に活動の例として示したように、遊びの内容をパネルシアターで説明し、子どもたちに楽しみながら活動を理解してもらえよう。な配慮が必要である。また、ジャンケンについても、子ども同士でスムーズに行える5歳児に対して、4歳児では子ども同士で進めるためには補助が必要な子もいる。しかし、実際の保育現場では3歳以上児のクラスでよく取り入れられている場面もあり、子どもが本当に楽しめるためにはどのような発達状況

○月○日	組(4歳児)	在籍 名(男 名・女 名)		○音楽を聴きながら歌に合わせて動くことを楽しむ。
中心となる活動	"かもつ列車"で遊ぼう！		ねらい	○相手を見つけてジャンケンをし、つながって遊ぶことでいろいろな友達とふれあう楽しさを味わう。
予想される子どもの活動			環境の構成と保育者の援助・留意点	
○集まって"かもつ列車"のパネルシアターを見る。 「シュッシュシュッ！」のところを口ずさむ。 「電車がつながったね」 「ジャンケンポン」と隣に座っていた友達とジャンケンをする。			○かもつ列車の曲をかけ、歌を歌いながらパネルシアターを用いて列車をつなげていく。 ○「もう一回するよ」と今度は子どもの絵を見せながら曲をかける ジャンケンのところはジャンケンのカードを用意しておき、ジャンケンをした様子をパネルに貼って残しておく。	
○パネルを見ながら少しずつ自分たちで遊べるのが分かります遊び出す子どももいる。一方でジャンケンや遊びのルールがわかりにくい子どももいる。			○2回ほど歌ったあと、ジャンケンやルールの確認のためもう一度パネルシアターを使って友達を探してジャンケンをすること、ジャンケンで負けた人は勝った人の後ろに回って肩に手をやりつながる（連結する）ことを確認する。「連結するよ」などあえて難しい言葉を使ってつながることを印象づけていく。	
○遊びのルールを確認をみんなでする。			○「お手伝いして」と一人の子どもに頼みパネルシアターでかもつ列車をする。「もう一人お願い」と人数を増やしつなげていく。	
○パネルシアターでかもつ列車の遊びを楽しむ。 友達がパネルシアターでつながっていくのを見て遊ぶ子ども、「いいな」「やりたい」と言う子どもがいる反面、余り表情を変えない子どももいる。			○「みんなですてみようか」「かもつ列車に変身」と音楽をスタートする。「最初は一人列車だよ」「1両編成でお願いします」など元氣よく遊びを始める。	
○立ち上がって列車に変身する子ども、戸惑ってあまり動かない子ども、すぐに走り出す子どももいる。			○走り出す子どもには「歌をよく聞いてね」と聞くことが大切であることが伝わるように繰り返し知らせる。	
○歌に合わせて喜んで遊び出す。			○戸惑う子どもには個々に声をかけて話をし遊びに誘うようにする	
○ジャンケンをする際相手が見つからず困っていたり、ジャンケンの判断がつかず泣いたりする。			○楽しい雰囲気になってきたら繰り返し遊ぶ。	
○つながってみんなで遊ぶ。			○最後の列車が出た時には「○○ちゃんの列車出発！」と合図し、みんなで長い列車になってつながる楽しさを味わわせ遊びを終える。	
○繰り返していくうちに遊びの面白さを味わうことができ、喜んで遊ぶようになる。				

図3.「かもつ列車」を取り入れた4歳児のうた遊びの活動例

の子どもたちが適しているのかをよく考えて取り入れなければならない。

このように、子どもの身体の動きと音楽の速さが一致できるような楽曲の検討だけではなく、歌詞の理解や歌の音楽的発達についても考える必要がある。例えば、修了式・育了式に合わせて、保育所・幼稚園での生活を振り返る様々な歌が歌われているが、歌詞の言葉一つひとつを大事にして子ども達に伝えたいものである。中にはリズムや音程をとることが幼児にとっては難しいものもあり、それを無理に歌わせている保育者も見受けられる。園行事は大人のためのものではなく全てが子どものためのものであることを忘れずに、子ども自身が感情移入できるわかりやすい歌詞の歌を選択しなければならない。

### 3) 幼児教育に向けた本学のうた遊び実践の取り組み

#### (1) 授業でのうた遊び実践の取り組み

本学では、保育学科1年生の前期授業科目「音楽IA」において、季節のうたやうた遊びに親しみながら、学生自身でうた遊びを取り入れた活動を計画

し発表する授業を行っている。授業の目的は、音楽の基礎的な知識である楽典を学びながら音楽に親しむ姿勢を養い、保育者の音楽表現の土台を築くことである。学生たちは14グループ（各グループ4人もしくは3人）に分かれ、うた遊び実践の発表内容についてグループでの話し合いを何度か行い、子どもに見立てた学生たちを相手にうた遊びを約15分間の中で発表をする。2015年度のうた遊びの実践発表では表2にみられるように「やきいもグーチーパー」や「さかながはねて」、「おおむしでたよ」などが発表され、中には歌う速度に合わせてうた遊びの歌詞の内容を変化させる工夫もみられた（図4）。

#### (2) 幼児教育に向けたうた遊び実践の課題

授業で行ったうた遊び実践の発表では、実際の子どもを対象としたわけではなく子ども役である学生たちと共にうた遊びを行う。そのうた遊びは書籍やインターネットなどの情報から得られたものがほとんどであり、発表内容としてはその内容を真似して練習する段階である。そのため、低年齢の設定であっても自分たちの話す内容に耳を傾け理解してもらい、うた遊びを1回説明するだけで身振りや遊び



表2. 保育現場で見られたうた遊びのまとめ

グループ	テーマ	うた遊びの内容
1	数字	ミッキーマウスの手あそび
2	食べ物	やきいもグーチーパー
3	動物	一丁目のドラネコの歌
4	人	ごんべさんのあかちゃん
5	わらべうた（乳児向け）	ちよちよちあわわ
6	わらべうた（幼児向け）	くまさん くまさん
7	植物や自然	小さな畑 大きな畑
8	生き物	さかながはねて
9	身体のふれあい	コケツコーダンス
10	指の動き	あおむしでたよ
11	楽器	ゴリラのおんがくかい
12	道具を使って	もみじ
13	ダンス性のあるもの	せみせみロック
14	ゲーム性のあるもの	はいポーズ

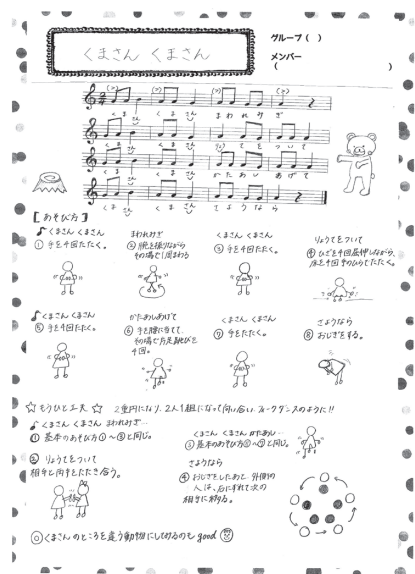


図4. 学生のうた遊びシート例

方も覚えてもらうことができる。しかし実際の保育現場では、子どもたちのその時の気分や発達状況、あるいは保育者との関係などが大きく影響し、自分たちがイメージしたようなうた遊びにならない場合もある。また、うた遊びを独立して行うのではなく、1日の保育の中でどのように位置づけるのか、または月間、年間を通したうた遊びの発展的な内容について検討していくことが、幼児教育に向けたうた遊びの在り方と考える。そこには、保育者の経験や嗜好でばらつきのあるうた遊びの選択ではなく、うた遊びを通して子どもの音楽的表現を育むことはもちろんのこと、心身の発達状況の確認や保育者同士の連携のツール、さらにはうた遊びを通して保護者と連携をとりながら子どもの発達や発育について検討する視点を持ち合わせておくべきではないだろうか。

#### 4. 幼児教育におけるうた遊びの課題

幼児教育におけるうた遊びの課題としては、まず保育現場でのうた遊びの定型化ではないだろうか。それぞれのうた遊びの内容に慣れてしまい、子どもの表現を引き出すようなうた遊びを展開して活動へとつなげることが難しくなっているため、年齢

によって遊び方を変容させたり、題材を検討する余地が中々見当たらないといえる。また、うた遊びが子どもに着目してもらう手段として扱われることも多く、うた遊びのねらいである“子どもに何を感じてもらいたいか、子どもの何が育つのか”を意識した上で、うた遊びを取り入れる必要がある。次に、CD伴奏で行ううた遊びも大きな課題と考える。CD機器やインターネットの画像を利用する伴奏は、音楽表現が苦手な保育者であっても手軽にうた遊びを楽しめる一方で、子どもの動作に合ったうた遊びの速さではなかったり、CD通りの遊び方になってしまったりとうた遊びの自由さが失われてしまう。児島（2009）が指摘するように「どの園でも同じような表現活動が行われる」懸念や、インターネットの普及によってうた遊びが数多く出回り、人気のうた遊びや目新しいものを優先する傾向もある。そのため、子どもの発達状況や集団（クラス）の方針といった保育の中でのうた遊びの位置付けが不明瞭になってきていると考える。自然の中の音や生の歌声、そして保育者自身が演奏する行為が子どもの心をほぐし、人としての温もりや心の豊かさを与えてくれることにつながり、人が人を育てるうえで必要なものの一つとしてうた遊びを捉えていかなければならな

い。

一方養成校では、うた遊びのより実践的な表現が求められるが、うた遊びが子どもとどのように関連しているのかといった学術的な視点や音楽的発達のつながりについて曖昧にされていることも多い。特に、学生たちはうた遊びの習得といった“技術面”を取り入れることを重要視してしまい、子どもの年齢や発達を踏まえた視点が疎かになってしまっている。また、現場でも人気のうた遊びやわらべうたなどは「子どもに良いって聞くから」「みんな知っているから」という理由で取り上げられる場合もある。わらべうたについては乳児にとっていいものとして育児書などに掲載されているが、なぜいいのかといった部分を理解した上で実践しなければならない。

うた遊びでは、その活動のねらいや対象である子どもたちを意識した上で、発展的なうた遊びへとつながっていかなければならない。そのためには、うた遊び一つひとつを音楽的視点や発達の視点などを踏まえて分析し、保育内容との関連性やうた遊びを通した活動の観点、また年齢や人数に応じた遊び方の工夫などが網羅できる教材化を、養成校と保育現場で連携し、うた遊びについて探求していくことが必要なのではないだろうか。今後、うた遊びの研究

意義の重要性を学術的見地から示唆できるような教材化の検討を進めていきたい。

※本研究は、本学の平成26年度学術教育研究特別助成金より助成を受けている。

## 引用文献

笠井キミ子・久原広幸・坂田万代・横山浩平(2015)「保育教育における手遊び歌についての一考察」中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要, 第47号, pp.1-11.

児島輝美(2009)「保育教材としての手遊び歌の現状と課題—データベースの作成を通して—」徳島文理大学研究紀要, 第77号, pp.81-95.

## 参考文献

小川容子・今川恭子(2008)『音楽する子どもをつかまえたい 実験研究者とフィールドワーカーの対話』ふくろう出版.

文部科学省(2008)『幼稚園教育要領』.

厚生労働省(2008)『保育所保育指針』.

吉田愛子・奥田恵子(2008)「保育教材としての「手遊び」に関する一考察」岐阜聖徳学園大学短期大学部紀要, 40, pp.37-47.

(受稿 平成29年1月23日, 受理 平成29年2月7日)

